

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	『発心集』にみる聖の二類型：蓮花城と心戒
Sub Title	
Author	山田, 昭全(Yamada, Shozen)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1986
Jtitle	三田國文 No.6 (1986. 12) ,p.9- 17
JaLC DOI	10.14991/002.19861200-0009
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19861200-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『発心集』にみる聖の二類型

——蓮花城と心戒——

山田昭全

一 蓮花城説話に付属する論説文

『発心集』巻第八話は蓮花城という聖が入水往生を試みて失敗する話である。

蓮花城が盟友登蓮に対して入水往生をしたいと告る。登蓮は一旦制止したが、相手の決意が固いとみて入水に協力することを誓う。かねて予告した入水の日が来る。そのことを聞きつけた人々が多数桂河の岸辺に集まって見物している。衆人環視の中を舟が淵に漕ぎ出し、蓮花城はめでたく入水をとげた。数日後病氣になった登蓮の夢枕に蓮花城が現われて言った。いよいよ入水の段になって急にこわくなり、もう一度制止してもらいたいときりに目で合図したのに、早く早くとせきたてられ、止むなく飛び込んだ。その恨みの一念故に魔道におち、かく夢中に現われたのだと。

さて、この話のあとに長明は長い論説文を書き加えている。まず

〔A〕是こそ、げに宿業と覚えて侍れ。且は又、末の世の人の誠となりぬべし。人の心はかりがたき物なれば、必ずしも清浄・質

直の心よりもおこらず。或いは勝他名聞にも住し、或いは憍慢

・嫉妬をもととして、愚かに、身燈・入海するは浄土に生るるぞとばかり知りて、心のはやるままに、かやうの行を思ひ立つ事し侍りなん。即ち、外道の苦行に同じ。大きな邪見と云ふべし。其の故に、火水に入る苦しみなめならず。其のころざし深からずは、いかがたえ忍ばん。苦患あれば、又心安からず。仏の助けより外には、正念ならん事、極めてかたし。中にも、愚かなる人のことくさまで、「身燈はえせし。水にはやすくしてん」と申し侍るめり。則ち、よそ目なだからにて、其の心知らぬゆゑなるべし。

と記して、さらに

〔B〕或る人の云はく、「諸々の行ひは、皆我が心にある。みづから勤めて、みづから知るべし。よそにははからひがたき事なり。すべて過去の業因も、未来の果報も、仏天加護も、うち傾きて我が心の程を安くせば、おのづからおしはかられぬべし。且々、一事を願はず。

〔C〕もし、人、仏道を行はん為に山林にもまじはり、ひとり曠野の中にもをらん時、なほ身を恐れ、寿を惜しむ心あらば、必ず

しも、仏擁護し給ふらんとは憑むべからず。垣・壁をもかこひ、遁るべきかまへをして、みづから身を守り、病ひを助け、やうやうすすまん事を願ひつべし。

[D]もし、ひたすら仏に奉りつる身ぞと思ひて、虎、狼来たりて犯すとも、あながちに恐るる心なく、食ひ物たえて、餓死死ぬとも、うればしからず覚ゆる程になりなば、仏も必ず擁護し給ひ、菩薩も聖衆も来たりて、守り給ふべし。法の悪鬼も毒獸も、便りを得べからず。盗人は念を起して去り、病ひは仏力によりて癒えなん。

[E]是を思ひ分かず、心は心として浅く、仏天の護持をたのむは、危ふき事なり」と語り侍りし。此の事、さもと聞こゆ。

と続けている。BCDEはひと続きの文で、冒頭の傍線Pの「或る人」が語ったことばである。いま後述の便宜のため、かりに四つの段落に分けた。結局「ある人」は、すべての行為の帰趨は心が決する、みづからの努力で心を安泰に保つはかはなく、他人にはどうすることもできない(B)、山野で仏道修行しても、もし命を惜しむ心があるならば、自分の身は自分で守りなが修行を深かめるべきだ(C)、しかし、もし、すべてを仏道に捧げて何物をも恐れぬ心境に達したならば、そのときこそ仏菩薩が擁護してくれるであらう(D)、そのような段階に達する以前に仏天の護持をあてにするのは危険だ(E)、としているのである。

二 心戒説話に付属する論説文

さて、この論旨とまことによく似た論旨を持つ文章が「発心集」の中にある。巻七第十二「心戒上人、跡を留めざる事」後半の論説

部分がそれである。

平家滅亡のおり発心して高野に籠った心戒房という放浪の聖は重源とともに入唐し、深山に入り、苛酷な修行にも堪えた。帰国後津軽・壺碑つるいなど地方を放浪した。建礼門院八条という心戒の妹がみすばらしい身なりの兄をさがし出し、山崎に庵室をあてがひ、小法師一人をつけて住まわせたが、間もなく一人の聖が訪れると、さっそく二人していづこともなく姿をかくした。小法師は二人が丹波を話題にしていたことがかりに、探しに行くと、はたせるかな穴太に訪ねあてることができた。だが、心戒の敵しい拒絶の前に小法師は一人で空しく帰らざるを得なかつた。その後心戒の行くえは杳としてわからなくなつたという話を記したあと、

[F]いと尊く、今の世にもかかるためしも侍れば、これを聞きて、我が心のおろかなる事をも勵まし、及びがたくとも、こひねがふべきなり。

というコメントを付し、さらに、

[G]ここに、^P或る人の云はく、「かくの如くの行、我等が分にあらず。一つには、身よわくして、病ひおこりぬべし。一つには、衣食ともしからば、なかなか心乱れてむ。身^③を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかじ」と云ふ。これ、ひとへに志浅く、道心少なき故なり。

と、またしても「或る人」のコメントを紹介し、こんどはこの「或る人」のコメントに対して

[H]実心おこらずは、仏法合ひがたし。露命は消えやすし。一念にて、他事を思ふべからず。片時なりとも恐れたらん事、毒蛇の如く捨て、此の身をば、水のみなもとといとふべし。かかれ

ばわざとも此の身を仏道の為に投げて、不退の身を得んとこそ
覺ゆべけれ。病ひおこりて死なんに至りては、思ひあるべき身
かは。惡業の依身なり。不浄の庫藏なり。つひに道の辺の土と
なるべし。⁽⁸⁾しばしいたはりて何かせん。いかに、衣食は生得
の法なり。天運にまかせてもあり。病ひは又、習に従ふ。いた
はるとても、必ずしも去らず。富める人のおとろへたる様を見
るに、ゆたかなる時、衣を厚く着て、薬を服して壁代をひき、
様々身をいたはるには、常に風熱きはひ発りて、神心やすき事
なし。

[I]此の人まつしくなりて、飢寒身を悩まし、服薬心にかなはず。諸々の惡事、をりにつけつつ皆身をおかす。昔の如くならば、忽ちに病ひ起りて死ぬべけれども、かやうに身を捨つる後は、病ひも從ひて去りぬ。これ則ち、身はならはしの物なるうへに、運命限りある故なるべし。況や、仏力むなしからずは、何の病ひか競はん。職感ならば、身もつよき事を得てん。

[J]すべていとへど死す。惜しめどもたまたれざるは此の身なり。たまたま仏法にあひ奉り、決定往生すべき道を聞きながら、飯の身をいたはり、五欲につながれて一期を暮す、はかなき事にはあらずや。

という論評を繰り出している。FからJまで原典ではひと続きの文だが、いまわかりやすくするため適宜段落に切った。

或る人が、自分のような者はとうてい心戒のまねはできない、からだをいたわりつつ、のどかに念仏するのがよいという(G)。これ対し著者は、仏道は実心がなければ成就しない。肉体は惡業の依身であり、不浄の庫藏であって、しかも亡びやすい。そのような身

をいたわるよりは、進んで仏道に猷じ、不退の身となるべきだ。衣食や病氣は天運にまかせれば何とかなろう(H)。心戒は身を捨てて貧苦のどん底にあまんじたが、仏力を得て病氣にもかからなかった(I)。所詮死ぬ命、決定往生の道を聞きながら、五欲の一生で終るのはおろかではないか(J)と論じている。

三 兩論説の共通性

ところで、さきの蓮花城とこの心戒とはともに「近き比」の実在の人として共通する。『百鍊抄』安元二年(一一七六)八月十五日の条に、蓮華浄上人以下十一人が入水した旨の記録がみえ、また心戒は出家前は平宗親と名の平家の一員で、阿波守に任じ、旧部下の栗田成良(II重能)は東大寺焼きうちの実行人であったという。⁽¹⁾長明の日野山中の隱遁生活には俗界からの情報をキャッチするの意外に敏感なアンテナを用意していたふしがみえるが、こうした実話もその情報網にかかったものであろう。歴史的にも他に所見のない貴重な資料と言うことができる。

兩者にはしかし同時代の人物という共通点はあるものの、仏道修行のレベルでは明らかに格差が認められる。前掲の二つの論説文を比べれば、長明がこの格差をどうとらえていたかがはつきりする。

蓮花城の場合、「或る人」の言を借りて、「心は心として浅く、仏天の護持をたのむ」(E)ほどの水準に達していない人物として位置づけている。これはちょうど、心戒に対するコメント部分(G)に、「これ、ひとへに志浅く、道心少なき故なり」と断ずる人物とは、ほぼ同水準の者であろう。自分はとうてい心戒のまねはできない、「身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかじ」と告白す

る「或る人」(P)が「志浅く、道心少なき」人だったわけだが、そうすると、この「或る人」(P)と「仏天の護持をたのむ」資格に欠けた蓮花城とはほぼ同水準の者とみなすことができよう。

蓮花城は極楽往生には失敗したが、仏道を志した聖である点では心戒と同列である。ただ心戒のように「不退」の域に至っていないだけである。一般の世俗の人とは区別されていることを読み落としてはならない。この蓮花城のような聖の修行法について「或る人」(P)が指示をしている。段落Cがそれである。「或る人」の言に対して「さもと聞こゆ」(E)と同感しているから、長明も同意見と考えてさしつかえない。

山中または曠野で修行していて寿を惜しむ気持があるうちは、外敵から身を守るべく、垣や壁をかこい、病気にかかれば治療を施せという。これはGにおいて「或る人」(P)が、衣食が乏しければ病気におかされやすくまた心が乱れて念仏ができない、だから必要な衣食はととのえて「身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏」することと相通している。すなわちCGは相通する段落である。

しかし、CGのような仏道修行では究極の「不退」を確保することはできない。Cにおいて「やうやうすすまん事を願ひつべし」と言っているように、この段階は次のDへ飛躍するための過程、準備期間と位置づけているようである。

それならDの段階とはどういう境地なのであろうか。具体的には「ひたすら仏に奉りつる身ぞと思ひて」、虎、狼に食われてもかまわぬ、食糧が絶えて餓死することもいとわぬという境地に達することである。このような境地に達した者は、結果として、仏菩薩の擁護を得て、外敵や病気からまぬがれることができるとしている。

蓮花城はDには達していなかったわけだが、心戒は明らかにCを突破し、Dに達した人物である。「飢寒身を悩まし、服薬心にかなぬ生活に甘んじていながら、病気や悪事は寄りつかない。これは「仏力むなしから」ざる結果である(以上I)。言いかえれば、「わざと此の身を仏道の為に投げ」ているので、もし病気で死んでも惜しくない、衣食は天運にまかせておけば何とかなる(以上H)という境地に達している。すなわち、さきほどのCとGが相通していたように、Dに対するHIも、みごとに相通している。

四 「或る人」の登場する説話群

さて、このようにみとけると、蓮花城と心戒の話に付属するやや長めの論説部分の論理構造は、実によく一致していることがわかる。蓮花城と心戒はほぼ同時代の実在の人間であり、長明の生きた時代にも重なっている。これをもって長明が同時代の隠遁者のあり方をどうとらえていたかが、かなり具体的にわかってくるように思われる。

ところが、ここに一つの問題が持ち上がる。蓮花城に付属する論説文はBCDEのすべてを「或る人」(P)の談話としている。これに対し心戒の場合はGのみが「或る人」(P)の談話で、HIJは「発心集」著者(≡長明)の論説となっている。この食い違いをどう考えるか、「或る人」とはそもそもどういう人物なのかという問題である。

三木紀人氏は「長明の著書『無名抄』にも「或る人の云はく」で始まる文章が目立つ。多く筆者長明自身の思惟を「或る人」に仮託して語ったものと思われる」と記しておられる。なぜ長明がわざわざ

ぞそんなテクニクを弄さなければならなかったのかについては何も明らかにされてはいないが、もし三木氏の言われるとおりだとすると、PとP'は長明自身ということになるから、蓮花城、心戒両者に対する論評をそのまま長明の隠者観または仏道観とみなしてよいことになる。

そこで、こころみに『発心集』における「或る人云はく」の用例を追ってみた。するとおもしろいことに、蓮花城、心戒のときと同様に、ほぼ同時代の隠遁者を話題にしている所で、しかも同様の主題、つまり道心の深淺を論ずるようなおりに、「或る人云はく」が頻出することに気づいた。

五巻第四話「亡妻現身、夫の家に帰り來たる事」は、愛妻を失った夫の、妻を求める心持があまりに強いために、火葬されたはずの亡妻が一夜よみがえってきて枕をかわして去るといふ澄憲法師の語った「近き世の不思議」な話のあとに、仏菩薩も真実に拝みたいと願う者の前にはその姿を現わすと論じ、

心をいたす事もなくて、世の末なれば（仏菩薩の出現は）ありがたし。拙き身なれば、叶はじなど思ひて退心をおこすは、ただ志の淺きよりおこる事なり。

と記し、そのあとに、「或る人云はく」として、かげろうは夫婦愛が強いという説話を紹介している。

澄憲法師という同時代人の語った「近き世の不思議」な話であつてしかも、「拙き身なれば、叶はじなど思ひて退心をおこすは、ただ志の淺きよりおこるなり」のような主張が展開される文脈の中に「或る人」が出てくる構造は、さきの蓮花城、心戒の場合とはなはだ近似している。

七巻第十三話「齋所権介成清の子、高野に住む事」は、尾張の齋所権介成清の嫡子が強い道心をおこし、大仏の上人（重源）について出家、高野山に住んで念仏と労役に身命をささげ、親が送る衣食もいっさい身につけなかったという話の末尾に、「或る人云はく」として

浄土を願はんには、身を全くして念仏の功をかさぬべし。何の故にか、身命をいたはらざらん。

と質問するのに対し、成清の嫡子が、
世は末世なり。身は凡夫なり。今たまたま心をおこせり。此の心さめざらん先に往生を遂げんと思ふ。此の故に身命を惜しまず。

と答えたとして結んでいる。齋所権介成清の嫡子はさきの心戒とともに高野山新別所専修念仏結業に加わった一人で、法名を寂阿弥、聖名を齋所聖さいしょせいと言ひ、建久六年（一一九五）に入寂した。⁽³⁾長明とはほぼ同時代の人である。

ここの「或る人」（かりにP'とする）と齋所聖との間にみられる道心の格差は、さきの「或る人」P'と心戒との間にみられた格差とほとんど一致する。「身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかじ」（P'）と「身を全くして念仏の功をかさぬべし」（P'）とは類似というよりも完全に一致する。これに対し「わざとも此の身を仏道の為に投げて、不退の身を得ん」と願った心戒と、「今たまたま心をおこせり。此の心さめざらん先に往生を遂げんと思ふ。此の故に身命を惜しまず」と言い切った齋所聖も道心の強さにおいてほとんど一致している。すなわち、齋所聖は完全に心戒型の聖であり、この兩人に対して、ほとんど同一の反応を示している「或る

人」P'は同一人物ではないかとさえ思われる。

卷八第二話「或る上人、名聞の為に堂を建て、天狗になる事」は、堂や仏像を建造して極楽往生をよげたかみえた高徳の僧が、実は名聞のため天狗道におちたことを知人の夢中に告白するという話。これは外見上は入水往生に成功したかみえた蓮花城が実は魔道におちた話と実によく似ている。そして

今の事なれば、名はたしかなれど、ことさらあらはさずとぞ、
或る人語り侍りし。

のように、ここでも「或る人」が登場し、しかもこれも「今の事」(＝同時代の実話)であった。ただ、ここには蓮花城や心戒のときのような論説はついていない。

卷八第六話「長楽寺の尼、不動の験を願はず事」は、一心に念誦する僧に本尊不動明王がたしかな姿を示したという話で、これは仏道一筋に献身すれば、仏菩薩もきくと応答し、守護してくれるとした前掲D Iの主張を検証する説話とみることができる。これもやはり十余年前多くの人が見聞した実際の事件で、

「彼の奈良の僧もすなはち覚え侍りしかど、忘れにけり」と
ぞ、或る人語り侍りし。

のように、「或る人」が登場してくる。

このほか、三卷九話「樵夫独寛の事」、五卷十二話「乞児、物語の事」、七卷五話「太子の御嘉賞能上人、管絃を好む事」、八巻一話「時料上人隱徳の事」にそれぞれ「或る人」が姿を現わす。このうち三卷九話が「むげに近き世の事」、五卷十二話が「治承のころ」に処刑された平家公達の話で、同時代の実話という条件を具備している。七巻五話には二人の「或る人」が現われるが、二人目だけが

同時代の実話という条件を満たしている。八巻一話は「中ごろ」の人の話に「或る人」がコメントしているので、同時代の実話という条件に合わない。ただしこのコメントは、悟り深い道心者には諸天の擁護があるが、懈怠の者には常に天魔がねらっているという内容のもので、蓮花城の「或る人」のコメントとかなり似ている。

さて、煩雑にわたったが、『発心集』における「或る人云はく」の用例を追ってみて、どのようなことが引き出せるのであるうか。一、二の例外はあったが、この「或る人」が語ったところ、ほぼ長明の同時代か「近きころ」の話柄である。どれも先行文献にはなく、『発心集』が初出のようである。ということは、これらの話柄はまだ記録されることなく、巷間に口頭で伝承されていたものではないかということを推測させる。

次にこの「或る人」はどういう人物であるか、一人であるのか複数であるのかという問題であるが、さきほどのP'の「或る人」はまるで同一人物ではないかと思われるほどよく似ていた。しかし、七巻第五話に二度出てくる「或る人」は別人とみたほうがよさそうである。とすると、『発心集』の「或る人」は、一人ではなく複数ということになる。しかし、それが五、六人という人数になるとも思われない。P'のように、印象の似かよう人を括ってゆくと、どうも二人ないし三人くらいにしほれそうである。

『発心集』の序文に「はかなく見る事、聞く事を註し集めつつ、しのびに座の右に置ける事あり」と書いている。口頭で聞いたことも集中に採り込んだとみなければならぬ。いっぽう「閑居友」上巻第十一話「播磨の国の僧の心をこす事」の説話論の部分に

誰をあはれまんとちかひ給へる仏なればか、さばかり惜しうす

る命をたてまつらん人をみすぐし給ふべき。

いはんや、この命をみな仏にたてまつりて、この功德をさゝげて、うき世をいづる種とせんとねがはむは、ゆゑしき心ざしなるべし。

のような文がみえる。これなどは蓮花城についての「或る人」の主張Dと実によく似ている。慶政は長明よりも三十五歳も年少だから、慶政が「或る人」たりうる可能性はあまりないが、しかし、いまかりに慶政のような人物が「或る人」であつたら、彼は道心者のことだけを語って話をとじることはなかつたであらう。話題の人物に対して何がしかの論評があつたとみるのが自然である。

以上のような推測を経て、結局、『発心集』中の「或る人」とは、たとへば慶政のように、みづから隠遁者となり、往生伝や求道者について高い関心を持ち、しかも長明と交流を持っていた人と考えるのがいちばん適當のように思う。長明は『発心集』編纂を思い立ったとき、おそらくそうした人物に積極的に問いかけて、その方面の情報を蒐集したのであらう。言いかえれば、『発心集』中の「或る人云はく」は、長明に情報を提供した人の実際の言動を反映して、いと考へるのである。

ところで、「或る人云はく」をもつ説話群には二つのタイプの道心者が取り上げられていた。一つは蓮花城型、もう一つは心戒型である。これは『発心集』の編者（＝長明）が二つのタイプに強い関心を寄せて取材したことのあらわれであらう。

蓮花城は往生に失敗する。しかし編者はだから蓮花城のようなタイプの男はだめだと非難しているのではない。人はこのようにみづからの心の状態がどんなレベルにあるかさえよくわからないところ

があるから、気をつけよと言っている。これに対し、心戒型の聖は、すべてを仏道にささげ、心が理想の高みに達している。まことに願わしい状態にある。すなわち、『発心集』の編者は、みづからの心を発して蓮花城型から心戒型へ高めてゆくべきだということを、これら一連の説話群で訴えようとしている。したがって、「或る人云はく」をもつ諸話は、『発心集』の主題そのものをかたち作る極めて重要な役割をになつていふことになるのである。

五 『方丈記』と『発心集』の間

前掲AのJの文章には、もう一つおもしろい現象がみられる。

『方丈記』末尾に

夫、三界はただ心一つなり。心もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿、樓閣も望みなし。（中略）もし、人この云へる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の気味もまた同じ。住まずして、誰かさとらむ。

という有名な一節がある。この一文、前掲A Bの傍線④⑤⑥と実によく重なっている。ことにBの④は譬喩を用いればそのまま『方丈記』の文になるとさえ思われる。

おほかた、世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。命は天運にまかせて、惜しまず、いとせず。身は浮雲にならずへて、頼まず、全しとせず。

これも「夫、三界は」の直前の文であるが、前掲Hの⑦⑧とかなりよく通じあうところが認められる。

さらに、長明の日野山中での生活は、

もし、念仏ものうく、読経まめならぬ時は、みづから休み、みづからおこたる。さまざまぐる人もなく、また恥づべき人もなし。

というように、幾分放縦なところがあった。これはGの⑥で「或る人」が、

身を全くし、心をしづめて、のどかに念仏せんにはしかりと述べている「のどか」さとかかなり近似しているはずである。

という次第で、『発心集』の主題に直接かかわる説話評論の部分には『方丈記』の文章と近似する表現が少なくない。『発心集』にはこのほかにも『方丈記』と類似する表現が随所にあつて、さすがに同一作者の文章であると感じさせるわけだが、それならば、長明が『方丈記』を執筆していたときの思惟と、『発心集』を執筆していたときのそれとは同レベルのものであったのだからかという疑問がにわかに浮上してくる。観点をかえて言うならば、この問題は、『方丈記』に展開する長明の生活態度がはたして蓮花城型だったのか、それとも心戒型だったのかという問題と密接にかかわってくるように思われる。当然ここでこの問題について掘り下げておかななくてはならない。

長明は『方丈記』の末尾で、

今、さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。

と述べている。みづからの工夫になる方丈の庵を日野山中に構え、そこでの「閑居の気味」を、自分一人の胸中に秘めておくことができなくて、この一編を草したのである。

ただ飯の庵のみ、のどけくしておそれなし。ほどせばしといへ

ども、夜臥す床あり、居居る座あり。一身をやとすに不足なし。寄居は小さき貝を好む。これ、事知れるによりてなり。みまさは荒磯に居る。すなはち、人をおそるがゆゑなり。われまた、かくのごとし。事を知り、世を知れば、願はず、わしらず、ただしづかなるを望みとし、憂へなきを樂しみとす。まずしくとも、自由な草庵生活は、肉体的にも、精神的にも、かなりの快適さを保証してくれたようである。

ところが、心戒は明らかにそうした草庵生活をこころよしとしなかった。彼は妹がせっかく用意してくれた草庵を借しげもなく捨てさつて、丹波方面へ姿をかくしてしまふからである。

病ひおこりて死なんに至りては、思ひあるべき身かは、悪業の依身なり。不浄の庫藏なり。つひに道の辺の土となるべし。しばしいたはりて何かせん(H)。

心戒型の聖はこのように自己の肉体さえも投げ捨ててしまふ。「ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふ」ゆとりなどどうしてい持ち合わせていなかった。

このようにみえてくると、長明の『方丈記』に展開する生活は、「仏道を行はん為に山林にまじは」っているものの、「なほ身を恐れ、寿を惜しむ」(C)段階にとどまるものであったと言わざるを得ない。そのような段階に身を置く者は、「垣・壁をまかこひ、通るべきかまへをして、みづから身を守り、病ひを助け」(C)なければならぬという。とすると、「ほどせばしといへども」「夜臥す床」と「昼居る座」とを保証した方丈の草庵は、長明の身を守り、病氣をなおすための垣や壁の役目をはたすものだったということになる。すなわち、『方丈記』に展開する長明の生活態度は明らかに蓮

花城型のものであった。

以上の考察から、次のような結論を引き出すことができる。

『発心集』を書いているときの長明の内面には、みずから心を発して心戒のような聖になりたいとの願いがあった。これが『発心集』著述の直接動機である。ということは、この時点で彼はみずからをかえりみて、彼が蓮花城の域にとどまっていることを十分自覚していたことを意味する。

いっぽう、『方丈記』を書いているときの長明の内面には、日野山中の草庵生活の快適さを誇る意識が充満していた。これが『方丈記』著作の動機であろう。草庵生活の快適さを誰に向かって誇るのかといえば、言うまでもなくそれは在俗の人々に向かってである。すなわち、このとき長明は、世俗の生活と隠遁生活を対比して、後者の優越性を認める位置に身置いていたのである。

日野に草庵生活をいとなく長明は、建暦二年(一一二二)三月末に『方丈記』を著わした。地位を争い、家屋の大小を競う世俗世間に対し、地位のない最小の家屋での生活がいかに快適であるかを吹聴した作品であった。同じ場所で長明は『発心集』を書いた。草庵を捨て、おのれの肉体さえも放擲した先輩の聖に対し、深い同情とあこがれを寄せた著述であった。長明の内面には、不徹底な自身の道心について強い自省の念がうずまいていた。

さて、長明の晩年をこのように整理するとき、『方丈記』と『発心集』の成立の順序をどう考えるべきか、おのずから明らかである。私は『発心集』成立後に『方丈記』の成立を想定する説をとらない。そして、

しかるを、汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなは

ち浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに周梨槃特が行ひにだに及ばず。

という反省の弁は、おそらく、名聞を忌避し、住居を捨て、衣食にさえ顧慮しなくなった玄資、増質、心戒、齋所聖らへの憧憬の念を裏がえしたものであろう。むしろ「不請阿弥陀仏」を「不精不精の念仏」ととるのは誤解と言わなくてはならない。

長明は、五卷第十三話において、紙反故に指図(家屋の絵図面)を描き、豪邸を建てた気分浸りに満ちていた「貧男」を、「少欲知足」の賢人として、一旦は肯定している。ところが、その直後に、そのような少欲知足は欲の強い世俗世間の人と比べたとき賢いと言えるにすぎないのであつて、どうせ望むなら「願はば必ず得つべき安養世界の快樂、不退なる宮殿・樓閣を望めかし」と結んでいる。私は『方丈記』はこの貧男の立場で書いたもの、『発心集』は「安養世界の快樂」にあこがれて書いたものと考ええる。そして、蓮花城はこの貧男の域にとどまり、心戒はその域を越えた人物とみるのであるが、いかがなものであろうか。

注

- 1 五味文彦「阿波民部大夫と六条殿尼御前」(『日本歴史』四〇六号 和57・3) および同氏「重源と浄土堂大仏」(『日本歴史』四三六号 和59・9) 参照。
- 2 新潮日本古典集成「方丈記・発心集」三二七ページ頭注参照。
- 3 松永有見「高野山の二十五三昧式について」(『密教研究』31号 昭和3・12) 参照。
- 4 貴志正造「発心集」から「方丈記」へ(『国語と国文学』五十五卷三号 昭和53・3) 参照。
- 5 貴志正造「方丈記不請の解」(『国学院雑誌』八三八号 昭和52・2) 参照。